

# ノヴァーリスの「Bildung」の意味について

— 「ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン」を中心に —

三 木 恒 治

岡山理科大学教養部

(1989年9月30日 受理)

## 序

「自己をまだ意識していない青年が、社会の中での課題を満たしながら成熟した個人へと内的に発展を遂げていく過程を描いたもの。」<sup>1)</sup> — これはMetzler文学辞典にある「教養小説」(Bildungsroman)の極く一般的な定義である。

近代の曙光とともに人々は中世の共同体の桎梏から漸く解き放たれ、各々が分化の道を辿り、自らの生き方を模索する必要に迫られることになる。十八世紀中葉以降、市民階級の勃興、さらにはフランス革命のドイツ的受容、つまり政治革命の前に内面の高貴化が必要ではないかといった反省とも相俟って、この「生の選択」の問題は俄かに尖鋭化してくる。このような問いかけに答える形で「ヴィルヘルム・マイスター」が登場するのであるが、ここでは現実の自己を理想のものへと近づけるべく自己を陶冶していくにあたって、自己の有限性を悟り集団の中で他者と協調していく諦念の姿が描かれている。これに対抗して書かれたとされるのが「ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン」<sup>2)</sup>であり、前者とは逆に無限の世界を個の中に吸収していく方法がとられているが、いずれも「教養のあり方」を巡って新たな局面を迎えた社会の精神的背景を的確に映し出したものとなっている。

作者の死によって未完に終わったが、ノヴァーリスが晩年精魂を傾けて取組んだこの作品は、ヘルダーリンの「ヒュペーリオン」、ティークの「フランツ・シュテルンバルトの遍歴」と並んで、ゲーテ、ジャン・パウル以後の教養小説の代表作とされており、その広袤性からさまざまな解釈が為されているが、ここでは「教養」(Bildung)の観点から、主人公の人間像を抽出してみたい。

## I

„Die höchste Aufgabe der Bildung ist — sich seines transzendentalen Selbst zu bemächtigen“<sup>3)</sup>

これは断章集「花粉」に収められているノヴァーリス自身の「教養」(Bildung)についての言及としてよく知られたものであるが、その最高の課題である「超越的な自己を獲得する」という理念が、「ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン」では形象豊かに表現され

ている。

作品と同名の主人公は、ちょうど二十歳になったばかりで、「それまで故郷の近辺の土地以外には足を踏み入れたことがなく、世間というものをただ話で知っているだけ」<sup>4)</sup>の青年である。彼は、見知らぬ旅人から聞かされ、また夢の中でも変幻自在な姿となって現れた「青い花」の謎に心を奪われ物思いに沈んだ毎日を過ごしていたのだが、或る日母の誘いに応じて共に祖父のもとへ旅立つ。そして夢の謎は物語が進むにつれて次第に解き明かされてゆく、というものである。

旅の途上での他の人々との出会いを通じて自己が培われていくという従来の教養小説の形式は踏襲しているものの、年代記的叙述は極力避けられ、アイゼナハから祖父の住むアウクスブルクまでの短時日の旅程の間に、主人公ハインリヒは生の枠を突きぬけてしまうような体験によって目標に近づいて行く。しかし物語の大部分は、「商人」「坑夫」「隠者」等さまざまな生の形式を代表する第三者の「語り」となっており、ハインリヒは「他者の話に耳傾ける」という受動的な姿勢に終始する。そもそもこの旅そのものがハインリヒの自発的な意志によって始められたものではなく、物憂げな彼の行く末を案じた母の計画によるものである。もとより南欧の「発展小説」(Entwicklungsroman)の系譜を継いでいる縦横無尽に世間を渡り歩く「悪漢」(ピカロ)の性格は、ドイツ特有の形態ともいえる教養小説では影を潜めているが、「ヴィルヘルム・マイスター」で既に見られた傍観者の性格がハインリヒの場合いよいよ強まっており、その軌跡はより閉塞した状況で展開されることになる。ただルソー等の自然崇拜主義者とは違って、社会に身を背けんがために自然にのみこんでゆくようなアウトサイダーではない。物語の骨組となっている対話によって社交的雰囲気絶えず醸し出され、人生の先達としてハインリヒを導く者達の熱狂的な語り口を通して生の息吹きが直截に伝えられているし、具体的な社会活動ではないにせよ「他者の見解を消化する」という行為によって彼の視点は外界へと向けられていく。隠者の言葉を借りると、「若い心は孤独ではいられない。それどころか人間は仲間とのつき合いを深めてはじめて或る程度独立することができる」<sup>5)</sup>のである。

またロマン派でよく現われる現実の二重構造もここでは見られない。他者の話によって自己の世界観が確立していくことがあっても、逆転することは決してない。外界と内面は二元的なものではなく、有機的に繋がっていると信じられている。ハインリヒは周辺へ目を向け社会的法則を会得することによって、自身の内面的法則を見出していくのである。

ロマン派以降、教養小説はよく芸術家小説の形態をとっている。行動する者から観照する者への移行とも言えるが、「ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン」も執筆前の1800年2月23日作者がティークに語っているように「詩の神化とするつもり」<sup>6)</sup>のものであり、ハインリヒも詩人へと成長していく。但しここでの詩人とは、世界を死したメカニズムと見做し現象を解体し分析していく自然科学者の対極にある存在のことであり、個々に孤立しているものを象形文字を組み合わせるように全体へと統合していく者として想定されてい

る。商人が語る二つの物語からして詩人を題材としたものであり、このような詩人観は全編を通じて至る所にちりばめられている。

ハインリヒは自身が未だ意識していない内に潜む詩人としての素養を他者との接触によって呼び醒まされる、という筋立てとなっているのだが、筋とは関係なく最後に彼が到達すべき事象は、「夢」に顕われたように最初から既に用意されており、詩人となることは予定調和的に定められている感がある。だから詩人へと成長するというより、詩人であることに目醒めていくという表現の方が適切であろう。詩人とは自らを越え出てさまざまな個を包摂している総合的な存在とされているので、世界を認識することは自己を認識することにそのまま通じる。詩人たるハインリヒの旅は、自己と出会うために世界へ歩み出るといふ求心的なものとなっていると言えよう。ichは再び自分自身に戻るために他者の世界duへ移りそれを自身の中に呼び込むという魔術的観念論の図式がここで提示されているのである。

そこで彼を取り巻く人物群を概観してみると——商人は「自然の神秘に触れた瞬間の喜びや酔心地を、ひっきりなしの商用によってかき消されてしまう」<sup>7)</sup> 外向性のタイプである。途中寄った騎士の館の主人は、十字軍の再興を夢見て刹那の熱狂に縛られており、そこで出会った東洋の娘ツリーマは望郷の思いに身を焦がし「現在」が空虚なものとなっている。鋳夫は日光と人との交際を避け孤独の日々を過ごしているが、歌とツイッターで退屈な仕事を楽にする術を心得ており、社会の規則に捉われず純粋な感情を持ち続けている。

これらの人物群は先述の総体的人間の部分的性格を担っており、それぞれ対極に配置されている。ハインリヒはこれらの生のアンビヴァレントな過剰を自身の内にとりこんでゆくのだが、その際「あれか、これか」の試行錯誤はみられない。自然の神秘の謎を解くためには生産と生活の労苦から解放されてなければならないが、かといって最初から世界から隔絶してしまってもそれは不可能となるのではないか——こうした本来なら成長にともなう二律背反の命題を、ハインリヒは彼らとの対話の中で「たった一とびの内観の道によって」<sup>8)</sup> 乗り越える。物語全体もこの二極の止揚の方向へと章を追って進んで行き、目的地アウクスブルクではさらに完成された人間像クリングスオールがジンテーゼとして登場するに至る<sup>9)</sup>。しかしハインリヒが天成の詩人であるとする、その素養は「旅」以前に形成されていなければならない。となると彼の教養発展を語る時、むしろ物語に入っている前段階、つまり幼少年時代が問題とされて然るべきであろう。その生活の中心は家庭に限られており、ここで注意したいのは両親の彼への関わり方である。冒頭の夢から醒めたハインリヒを真心こめて抱擁する母親と、その長寝に腹を立てるだけの父親の態度の差一つとってもわかるように、息子の成長に対する二人の姿勢が決定的に違っている。ハインリヒの教育がそれまで殆んど母親の手に委ねられていたことも容易に推察できるだろう。

社会に参加していくことを余儀なくされる「男性」は無垢を失い、社会機構の結節点として世界を局部的にしか把握できない。逆に「女性」にとって世界は不可知のままであり

続けることが可能で、その分認識の対象として限定された形ではなく、生の姿で彼女の前に現われ出る。ハインリヒはこのような女性的な愛情に庇護されて、内的な活動性が外の世界に邪魔されずに育まれたために、天命の声に従い自分自身を完成していく詩人たる素地が与えられているのである。母親はこの旅でも後見人のようにハインリヒに付添っている。それがためか彼は女性的な包容力で互いに詰抗し合う生の理念を円滑に受け入れ、IndividualitätをTotalitätへと造り上げていくことができる。

## II

女性に体现されている「無垢」の性格は、「幼児」と共に黄金時代に喩えられる。そこでは人間と自然は一体感のうちに安らっていたが、墮罪によって楽園を追放された人間は自然の外に置かれ、「信仰」と「愛」という古い美德は「知」と「所有」という新しい美德によって解体される。自然から遊離し、人間は存在の根を失い、自分の創造を「神への奉仕」と考えなくなった。商人の語るアトランティスのメールヒェンは、この経緯を寓意的に表現している。自分だけが神の子だという傲慢な意識が芽生えた途端王と国民の間に亀裂が生じ、王女の失蹤によって黄金時代は終わる。しかし彼は愛とポエジーの力によって失われた畏怖の感情を取戻すと、王女との再会が叶い楽園はめでたく回復されることになる。黄金時代の弁証法的展開は、さらにクリングスオールが語るメールヒェンで頂点に達する。詩作の象徴であるファーベルがエロスの情熱の力などを借りて原初の世界を再現するという創生神話の形をとったこのメールヒェンには、時空を超えたあらゆる説話や宇宙の諸々の力が結集されている<sup>10)</sup>。クリングスオールはそれまでのハインリヒの旅の伴侶を総括したようなキャラクターの詩人であり、ゲーテがモデルだというのが定説である<sup>11)</sup>。このメールヒェンは「少しばかり自信を持って貴方にお見せできることと思います」<sup>12)</sup>と自負を持ってFr. シュレーゲルに洩らしているように独立したメールヒェンとしても珠玉の作であるが、全体の中核部となっており、人物配置の相似効果によって深い象徴力をロマン全般にもたらしている<sup>13)</sup>。

シラーにとって演劇がそうであったように、ノヴァーリスの場合、メールヒェンが道徳的教育手段として用いられている。パルツェン三姉妹の糸紡ぎの歌„Ein jeder lebt in Allen, Und All' in Jeden auch.“<sup>14)</sup>に集約されているように、一人の人間がマクロコスモスを自身の内に取りこみ、多くのものに関わり密度の濃い生を生きることがクリングスオールのメールヒェンの中心テーマであり、そのままロマン全体にも波及しハインリヒの状況と巧みに合致したものとなっている。彼の魂の遍歴は、日常の領域からメールヒェンの枠組を通して宇宙の神秘的営みにまでダイナミックに跳躍するものとなる。内面の活生浄化のため現実を夢幻のコードに組み替えるというノヴァーリスのロマン化の累乗作用は、このメールヒェンで最も美しく結実しているとはいえないか。

メールヒェンについてのノヴァーリスのコメントは、断章集にも数多く残されている。

「真のメールヒェンは、予言的叙述・理念的叙述・絶対的叙述であり、真のメールヒェン作家は、未来を予言する者である。」<sup>15)</sup>

「メールヒェンは、ポエジーの規範である。」<sup>16)</sup>

「メールヒェンは、妙なる事物・出来事の合奏である。」<sup>17)</sup>

「メールヒェンは、我々の神聖な歴史ときわめて似通ったものである。」<sup>18)</sup>

彼がメールヒェンを創作の最高の段階にあるものと考えていることは紛れもなく、その意義は個の有機的な生を調和的戯れのうちに普遍的なものに高めていくことであり、ギリシア劇のコロスと同様、ポエジーは生のリズムを生み出すのに欠かせない要素である。しかし自由な想像力を奔放に助長するだけでなく、生のさまざまな約束事を内包する神話の拘束力によってそれを限定する機能もある。「拡張」「収束」の往復運動によって一面性は克服され、中庸の気分のうちに豊かな教養は推し進められる。

「世界から背いて自分の内面に退却してしまうのではなく、見えない諸々の力関係の解明に尽力し、活動的に外界の出来事を自分の中にとりこんでいく——いわゆる『内面』と『外界』相互の変容の仲介者が詩人であり、ポエジーとはこの相互作用によって人間を自分自身の上へ押し上げることを目指したものである。」<sup>19)</sup>とBruno Müllerは、詩人とポエジーについて述べているが、クリングスオールからハインリヒが感得するのは、百科全書的にあらゆる事象を解説し、メールヒェンの形式にまで煮詰めていく詩人像である。

### III

クリングスオールのメールヒェンで第一部は終わるのであるが、さらに物語は第二部へと続いて行く。前半部で主人公は自分の周囲の世界の意味を理解しているわけではない。「さまざまな精神が、例えば詩の国のロマンチックな東洋は甘い憂愁を帯びて君に挨拶し、戦争は荒削りな壮麗さで君に話しかけ、自然と歴史は鋤夫と隠者の姿をとって君の前に現れた。」<sup>20)</sup>という七章のクリングスオールとの対話の中でその正体が解き明かされるが、それはあくまで媒体を通じて予感するという域を出ないものである。しかし予感を通じて次第に俯瞰像が見えてくるように、彼の視界は上方へと昇ってゆく。物語の発端からして既に「僕は、その夢が僕の魂の中に大きな歯車のように入りこんできて、それを力強く動かして前へ進ませるのを感じる。」<sup>21)</sup>とあるように、日常の意識下に閉じこめられている「夢」の描写で始まって、その中で物語の先取りがされている。

このような世界の実相を暗示するような「夢」のヴァリエーション、つまり「現在」から逸脱する装置が、物語の処々に施されている。現在の叙事的描写はわずかで、枠物語の他も大部分が昔話となっており、プラトン流に言えば「アナムネーシスによる世界の内面化」が為されることになる。ここで「現在」は徹頭徹尾ネガティブなものとして設定されており、そこからの脱却がハインリヒの行程であるともいえる。

「詩人はあらゆる瞬間に超感覚的存在となれる世界市民である。」<sup>22)</sup>とノヴァーリスは述

べているが、ロマン全体が「回想」「予感」「期待」「信仰」「憧憬」といった「現在」を浸蝕する情感に染め上げられている。

まず「旅」は「死の最初の先ぶれ」<sup>23)</sup>であり、「夢」の中には「人生のあらゆる映し絵が投げ込まれている」<sup>24)</sup>また各章の背景となっている「薄明」の光景は、死の世界の象徴である「夜の闇」と日常の世界の象徴である「光」が混交した色艶やかなものとなっている。一行が隠者と出会う「洞窟」は「その石の床からは荘かな原始世界がせり上がってきて、円屋根からは明るく喜ばしい未来が金色の天使の姿をして歌いながら漂い下りる」<sup>25)</sup>というように、それぞれ「無時間の世界」の書割として有効に使用されている。

ここでの「いましがた過ぎ去った数時間が、長い数年のように彼の背後に横たわっていた」<sup>26)</sup>という遠近法のパースペクティブの消失感は、作者のゾフィー体験に由っている所が大きい。彼は自身ではないが、最も身近な者を失うことで「死」の世界を垣間見た。Rudolf Meyer等数多くの研究者が指摘しているように<sup>27)</sup>、悲しみに幾日か明暮れした後ゾフィーが普遍的な人類の救済者キリストに変容していく姿を彼女の墓場で眼の辺りにしたという決定的な体験により、人間は日常世界から遮断されることで時空を超越した形而上的領域へと連れ去られるが、それは自己の中心へと戻ることであり再生への原動力となることを彼は身をもって悟るのである。この体験のさなか、その裏付けをするかのように「より良き自己は、人生の場面の転換に求められねばならない。つまりゲミュートをさまざまに変化させる術を学ばなければならない。それは自分自身と、自分が行動し体験したことに絶えず思いをはせることである」<sup>28)</sup>と日記に誌している。

この実存的体験を契機にノヴァーリスは多産な創作活動に入っているのだが、作品の中では「痛みから新しい世界が生まれる」という構図として使われている。古の詩人の万物唱和の力を讃えた「アリオンのメールヒェン」では盗賊に命を奪われそうになる場面、「アトランティスのメールヒェン」では嵐の一夜を境にした王と娘の別離、「クリングスオールのメールヒェン」では楽園が悟性の象徴である書記の手にかかって滅びる場面として据えられているが、ロマン全体では第二部の冒頭、ハインリヒが恋人マティルデを失い、巡礼となって失意のうちに再び登場する場面となってほぼ忠実に反映されている<sup>29)</sup>。

第一部では主人公の視点は周囲へ向けられ、他者との対話によって外界を内へとりこみながら幻想の世界を一気に駆け上がっていくのだが、マティルデの死（ただし実際の描写ではなく「夢」の中で語られているだけなのだが）によって反転して深淵へ降りてゆく。そしてこの喪失感が発条となって、一部では相互浸透はあったものの画然としていた「内」と「外」の閾<sup>しきい</sup>が外され融和状態が生じる。ここでハインリヒはそれまでの諸事象の謎、つまり彼が見聞してきたことは目新しいものではなく、既に存在していて何度も姿を変えて現われていたことを悟るのである。ただ全体像を捉える達観した境地に至るためには、「他者の話を聞く」だけでは覚束ない。クリングスオールをもってしてもハインリヒをそこまで導くことはできない。先述の仮死の体験が、一種の通過儀礼——「我々の生命をロマン化

する原則<sup>30)</sup>として必要だったのである。死にも似た静寂が支配する<sup>31)</sup>山中でハインリヒが最後に出会う老人ジルヴェスターは、現実社会と距離をとって歴史を眺める隠者同様真正面から生に立向かうのではなく、「現在の圧倒的な感銘のもとでより、回想の穏かな作用のもとで歴史に対する感性が花開く。」<sup>32)</sup>という見解の静観型の人間である。彼は世界の経緯を神が自己を実現していく過程とみなし、人間の無常性が神の永遠性へと収斂<sup>れん</sup>していく所に教養の到達点を見ている。そのためには、神との関わりの中でもう一度生を捉え直そうとする倫理意識が要求される。

ノヴァーリスがこの作品で最終段階の理想像として提示しているのは、ジルヴェスターのように道徳的に完成した者である。道徳的存在とは、本能・理性双方の束縛から逃れ、精神と身体が有機的に統一され均衡と調和のとれた者である。「生々とした奇しき統一像をもって人間の身体という繊細な象徴のうちに宿り、それに魂を吹きこみ、精神の全肢節を真実の営みに導く<sup>33)</sup>良心を備えたこの人間像は、物語の中で段階を追って「個と共同体」さらに「人と自然」、そして第二部では俗世と彼我、つまり「神と人の世界」の調和を造り出す者へと展開をみせる。自己完結的ではなく、全性を内包する道徳的人間へと上昇していくことによって、母親の手を離れたハインリヒは真の意味で自立するのである。

#### IV

ハインリヒの歩みをステレオタイプで表わすと、NaturmenschからTheoretikerとPraktikerの相克を経て、Künstler（芸術家）への成長と行うことができる。別言すればEinheit（単一性）がVielheit（多様性）に枝分かかれし、最後にはAllheit（全体性）へと至る過程である。この発展の類型は、本能的人間が、共同体の中で規則に従って生きる社会的人間へ、さらに世界の多様性と自身の特殊な世界との関係を認識する良心的人間へと成長を遂げていくというペスタロッチの唱える「自然の作品」「種族の作品」「個の作品」の三段階に相当するものである、とKlaus Geppert は近代教育研究家の先駆としてのノヴァーリスの側面を強調している<sup>34)</sup>。ただノヴァーリスの場合社会的有用性の発想は稀薄である。逆に、ユダヤ・キリスト教の旧約と新約を踏まえたような「予感」と「成就」という題銘からもうかがえるように、神の自己実現に詩人が携わるという宗教色が看過できない。しかしそれは教条的なものではなく、聖書の規範化によってしめ出された「夢」や「メールヒェン」を使って全体の筋を黙示録的光景に凝縮して予感させているように、新たな福音としてより普遍性を帯びたものとなっている。「教養小説」としての「ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン」の最大の特徴は、統合・調和に向けてのこの果てしない幻想の舞台の構築にある。それも社会の領域を平面的に広がっていくのではなく、天を夢見て飛翔を試みたり内面へ沈潜したりするのである。

啓蒙期の多くの思想家がそうであったように、自然の秩序と道徳的世界の秩序は、ノヴァーリスにあっては決して分離した二極であってはならなかった。あらゆるものは全体の分節

であり融和を求めて索き合っている、と彼は考えた。ハインリヒの場合も、無意識のうちに微睡んでいる自己同一性の萌芽が周囲との軋轢によって分断されるのではなく、むしろその視線の重層化に支えられて限りない省察を促され、あらゆる対立項を吸収しながら連続体へと完成していくのである。自己を他者の視線の焦点と化すということは、自身からいったん身をもぎ放し自己を疎遠なものとすることを意味する。この自己を対象化する行為が、遙か彼方に予感される別の生へ近付いていくための第一歩となる。欠かすことができないのが、均衡を保ちながらも拡張していく際の部分と全体とのバランス感覚である。ロマンの厳格な入れ子構造と同様、部分は全体のイメージを包含していなければならない。そもそも大がかりな仕掛けはこの観点を獲得するためであり、それに成功した者はアナロジーの杖によって世界史を個人の発展のプロセスとして理解し、また外への眼を通して内側を覗くこともできる。自己と世界は相互補完的な半身づつを形成し、経験の道を経た内的観察が可能となるのである。ザイスの使徒の中の「ヒアシンスと花薔薇」のメールヒェンにあるように、知的観照は自身を知ることにつながっている。世界を放浪するヒアシンスは世界が不可欠な半身であり、そこに帰るべき領域があるからこそ、自身と再び邂逅できるのである。そして象徴の衣をまとめて二つの世界を仲介する詩人となることこそが、ハインリヒの天命であったのだ。

## 結 語

自分自身を越えることが漸章でのBildungの定義であったわけだが、本論ではその実践行為としてハインリヒが一個人の魂の奥処から、宇宙の次元にまで自分を高めていく様を考察してきた。このマイクロコスモスとマクロコスモスの照応は、教養小説が形式内在的に備えている「普遍的理念を人生という特殊な形式で表現する」という性質に最も合致するものである。しかし人間という有限な身体に閉じこめられている個は、所詮相対的な地平へと揺り戻されざるを得ない「世界内存在」としての宿命を背負っている。ロマン化の累乗理論は、「である」の状態にとどまるのではなく、つねに「になる」ことを焦がれ続けることにあるが、この行為は現実を閉め出してしまうか、病的なまでに現実を多様化するか、いずれにしても現実を空洞化しなければ全うされることはない。自己の内部のもう一つの自己を見つめ続けるという成長志向も、見方を変えれば分裂した自我と中心点の不在を浮彫りにしていることは否定できない。神的なものとの等価を目指したこの運動はとどまる所を知らず、完成像に達することがその行為の意味を否定するという矛盾を孕んでいる。

「ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン」は教養小説を最も純化したやり方で窮めたが、それだけ諸々の問題を抱えこんだことは明らかで、「教養」と「現実」との関係に改めて疑問を投げかけたことは確かであろう。



## 《TEXT》

Novalis 1978 Carl Hanser Verlag

Band 1 Das dichterische Werk Tagebücher hrsg. von Richard Samuel

Band 2 Das philosophisch-theoretische Werk hrsg. von Hans-Joachim Mähl

## 〔註〕

- 1) Vgl. Metzler-Literatur-Lexikon : Stichwörter zur Weltliteratur hrsg. von Günter u. Irmgard Schweikle-Stuttgart : Metzler 1984 S.53
- 2) Vgl. Samuel, Richard : Novalis, Heinrich von Ofterdingen In : Der deutsche Roman Struktur und Geschichte hg. von B.v.Wiese Bd.1 Düsseldorf 1963 S.267  
伝説上の聖杯騎士ハインリヒ・フォン・オフターディンゲンが活躍したのは、中世からルネッサンスへの過渡期とされている。ノヴァーリスはこの話を同郷の知人から聞いたのであるが、「過渡期」のモチーフを生かすために、時代設定を当時に置き、騎士から詩人へと換骨奪胎を図ったと思われる。
- 3) Bd. 2 S.238
- 4) Bd. 1 S.248
- 5) Bd. 1 S.303
- 6) Bd. 1 S.732
- 7) Bd. 1 S.256
- 8) Bd. 1 S.253
- 9) Vgl. Walzel, Oskar : Die Formkunst von Hardenbergs „Heinrich von Ofterdingen“ In : GRM7 (1915-19)  
彼は「ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン」の文体を詳細に分析しているが、人物群・枠物語などは全て定立-反定立-総合の三拍子で漸層的に進行していくことを指摘し、nebeneinander な直進の方向をとる「叙事的なもの」から ineinander, durcheinander な深化の方向をとる「劇的なもの」への移行をそこに認めている。
- 10) Vgl. Diez, Max : Metapher und Märchengestalt III Novalis und das allegorische Märchen In : PMLA48 1933 S.488-507  
この著はメールヒェンの各々の形象の持つ比喩的意味と出自（例えばフライアは平和、アルクトゥールは偶然を意味し北方神話、エロスは愛でギリシア神話、ジニスタンは空想でアラビアのメールヒェン等々）について詳述している。
- 11) Vgl. Samuel, Richard : a.a.O. S.272 ノヴァーリスは、クリングスオールを描ききることによってゲートを凌ごうとしたのだとされている。
- 12) Bd. 1 S.739-40
- 13) Vgl. Voerster, Erika : Die Einlage im romantischen Roman Interpretationen Novalis „Heinrich von Ofterdingen“ Bonn 1964 S.149

「Fenstertechnik」と呼ばれるこの手法によって、挿入部は全体を呑み尽くす磁場となり、そのため筋の錯綜を免れている。

- 14) Bd. 1 S.351
- 15) Bd. 2 S.514
- 16) Bd. 2 S.691
- 17) Bd. 2 S.696
- 18) Bd. 2 S.801
- 19) Vgl. Müller, Bruno : Novalis der Dichter als Mittler Lang, 1984 S.63
- 20) Bd. 1 S.331
- 21) Bd. 1 S.244
- 22) Bd. 2 S.235
- 23) Bd. 1 S.250
- 24) Bd. 1 S.244
- 25) Bd. 1 S.299
- 26) Bd. 1 S.311
- 27) Vgl. Meyer, Rudolf : Das Christuserlebnis und die neue Geistesoffenbarung Stuttgart 1972 S.60  
彼は、このキリスト観照の体験を機に宇宙の創造力を自在に内面に取りこむ操作が可能になったと述べている。
- 28) Bd. 1 S.466
- 29) この第二部の冒頭と、「夜の讃歌」の第三歌は、共に1797年3月13日の日記と酷似している。
- 30) Bd. 2 S.754
- 31) Vgl. Samuel, Richard a.a.O. S.284  
ハインリヒがここで出会う少女 Zyane は、ラテン語の Cyaneus (himmelblau) から派生。ロマンの主要モチーフとなっている「青色」を意味するが、死者の世界の象徴でもある「矢車菊」の意味もある。
- 32) Bd. 1 S.304
- 33) Bd. 1 S.381
- 34) Vgl. Geppert, Klaus : Die Theorie der Bildung im Werk des Novalis Lang 1977 S. 262

## Über das Problem der Bildung im Werk des Novalis „Heinrich von Ofterdingen“

Koji MIKI

*Abteilung der Allgemeinen Bildung von  
der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama*

*1-1 Ridaicho, Okayama 700 Japan*

(Am 30. September 1989 empfangen)

Dieser Aufsatz behandelt das Problem der Bildung im Roman „Heinrich von Ofterdingen“. In diesem Werk befinden sich besonders viele pädagogische Momente. Dieses allumfassende Problem ist im geistesgeschichtlichen Kontext von Novalis und im Zusammenhang mit seinem magischen Idealismus zu interpretieren. Die Entwicklung der Hauptperson von der „Individualität“ zur „Totalität“ vollzieht sich auf der dialektischen Weise. Indem er den Dualismus zwischen Innenwelt und Außenwelt aufhebt, gelangt er zum Zustand, der Freiheit, Harmonie und Sittlichkeit enthält.

Unter der Perspektive des Bildungsromans möchte ich die Struktur der Erzählung und die Menschenbilder, vor allem die Rolle des Dichters betrachten.